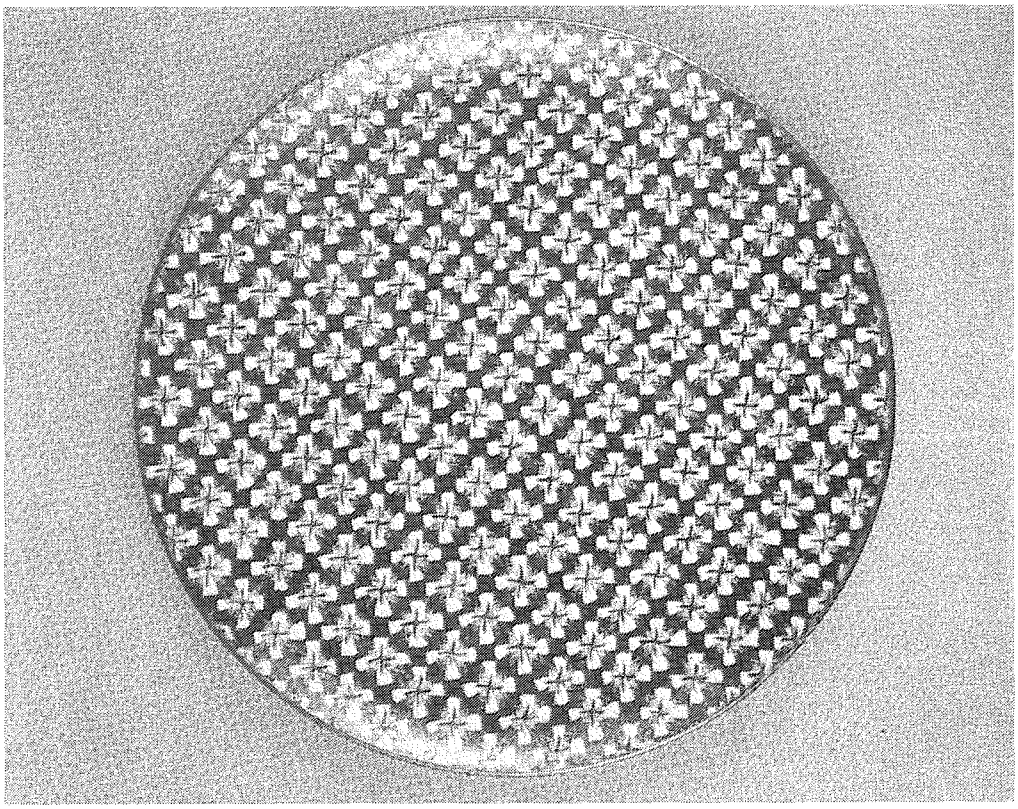
はくぶつかん　プラネタリウム　古民家　公園

あるむぜお

府中市郷土の森だより　No.1　al museo



富本憲吉作　磁器　色絵四弁花模様皿
（富本憲吉記念館）

ごあいさつ

市長　吉野和男

市民の皆さんが久しく待ち望んでいた府中市郷土の森が去る4月4日に開設いたしました。すでに4か月余が経過し、多くの皆さんにご覧いただいております。これもひとえに、市民の皆さんをはじめとする関係各位のご支援とご協力の賜であり、心から謝意を表します。

郷土の森は、13ヘクタールという広大な敷地を有し、府中の歴史と自然を融和させた新しいタイプの総合博物館です。開設以来、いくつかの事業を行なってまいりましたが、今後一層活発な事業を展開していく予定であります。

さて、このたび府中市郷土の森だより「ある　むぜお」を刊行する運びとなりました。このだよりを通じて、皆さまに当施設の活動を理解していただくとともに、この郷土の森がより親しみやすい知的レクリエーションの場となりますことを念願いたします。

最後に、今後とも一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

特別展

富本憲吉 ――白磁と模様――

9月22日(火)～10月18日(日)

富本憲吉、近代日本の陶芸界で独自の境地を確立した彼が世を去って、既に四半世紀近くが過ぎました。

1955年69歳の時、彼は色絵磁器の分野でいわゆる人間国宝に認定されましたが、そこから受ける富本作品のイメージは、華やかでいて端正な金銀彩でしょうか。

あの独特の世界は、金と銀を同時に焼き付ける困難を様々な試みによって克服し作り上げたものです。独自性、創造性は、晩年の金銀彩のみならず、初期の頃からの彼の主張でした。

バーナード・リーチとの出会いによって、郷里大和で作陶を始めた頃、「模様から模様をつくらず」と述べ、人や過去のものを模倣すまいと決意したことは終生守られたのです。

そうして作られた個性的な作品を、いかに多くの人が日用品として使えるか、これも富本にとって大きな問題でした。〝用と美〟〝個性と普遍〟、近代という大量生産時代にあっては、これらを一つの作品の中に籠めることは大変難しいことです。しかし、敢えてそれを実現しようとした彼こそは、まさしく自分の時代を生きようとした〝陶工〟といえましょう。

※

大和の旧家に育ち、若い頃ヨーロッパ留学を経験した彼の知性と、個性への誇りは、職業としての陶芸にだけ示されたのではなく、生き方そのものを支えていました。

彼の妻となった尾竹一枝は、青鞜社の同人でもあり、新しき女として喧伝された人でもありましたが、二人による家庭も、当時としては実にユニークなものだった様です。人一倍強い個性同志が、ぶつかることを承知で認め合う。

その頃から富本家を知る丸岡秀子氏は、後年それは〝私にとって近代とのめぐり合いだった〟と述べておられます。

子女の教育についても、イギリスでの見聞もあり、村の小学校は〝自由の牢獄〟と述べて通わせず、わざわざ東京から家庭教師を招いたり、上級学校の先生に個人教授を受けさせました。

当時、奈良女高師で教鞭をとっていた青木茂則氏は、夫妻の方針に賛同して、二人の子女に英語を教えました。その縁で作品を贈られた氏は、晩年府中市内に住まれていましたが、御遺族の御好意により、このたびそれらを郷土の森で展示させて頂くことになりました。

未公開のこれらと共に、大原美術館、富本憲吉記念館、奈良県立美術館の御協力も得て、1920年代～40年代の作品を中心に特別展を開催いたします。

記念講演会

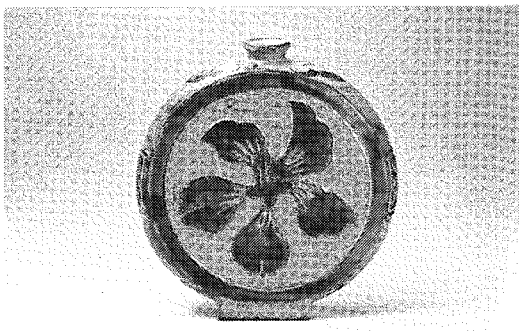
『富本憲吉・一枝夫妻をめぐって』

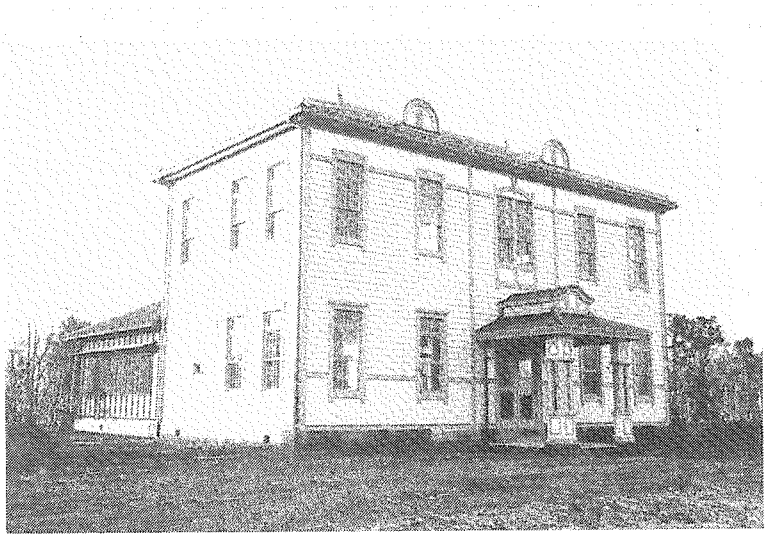
丸岡秀子氏(作家)

10月4日(日)　午後2時～

郷土の森　博物館本館大会議室

(定員/150名)





旧所在地	府中市宮西町1－8
解　　体	昭和59年6月～8月
復　　原	昭和61年12月
構　　造	木造2階建瓦葺 一部平屋建銅板葺
延床面積	279.07㎡
設計・監理	早稲田大学建築史研究室（代表）渡辺保忠
施　　工	〔解体〕（有）田中歪 〔復原〕（株）大門組

東京都指定有形文化財

旧府中町役場庁舎

大正10年（1921）に竣工したこの府中町役場庁舎は、多摩地方に現存する役場建築物で最古の建築物であり、また大正デモクラシーの風潮のなかで、地域住民が「ワシらの町役場」という意識のうえで建築した、ユニークな庁舎建築です。この町役場は昭和62年2月に東京都指定有形文化財（建造物）に指定され、大正時代の建築物としては都指定第1号となりました。

この町役場庁舎は、正面から見ると左右対称（シンメトリー）の2階建洋風造りです。しかし裏に回ると、和風造り平家建附属舎がとりついた設計となっています。表が洋風、裏が和風というこの組合せは、あまりにもアンバランスにみえ、附属舎の材料が新材ではなく旧材を使用していたことなどから、調査の初めの頃は、この両者が別々の建築、つまり附属舎が後年増築されていたものと考えられていました。ところが当時の町議会議事録などを調べていくうちに、旧警察署の解体部材を府中町が払下げをうけて、町役場附属舎建築材として転用したことがわかり、はじめから洋館に、旧材使用の和風附属舎があったことが確認されたわけです。当時の町財政の苦しさゆえの、旧材転用であったわけです。

さて、具体的にこの建築をみていきますと、まず目につくのは屋根の上の天窓でしょう。本来は屋根裏の採光を目的とするものですが、この町役場の場合、単なる装飾的なものとなっています。また正面入口の車寄の二段屋根には、日本の伝統的な意匠の、唐破風が象徴的に用いられていることなど、見どころはいっぱいです。

このように洋風造りとはいえ、実際に建築に携ったのは地元の職人さんであり、日本の伝統的な意匠もみられるなど、大正建築物を知るうえで、恰好の建物といえるでしょう。

郷土の森では、この町役場を文化財として将来にわたって保存することにより、建築史上貴重な価値とともに、府中市の歩みを示す博物館資料として活用しています。（G）

博物館入門講座 その1

博物館って、どんなとこ？

═郷土の森って、なに？═

郷土の森は、市制施行30周年記念事業の一つとして計画され、府中の自然と歴史と文化の縮図を目指してつくられた博物館です。〝蔵〟のかたちをした博物館本館と日本一の規模を誇るプラネタリウム、そして、13万平方メートルという広大な公園と復原建造物、これらを一体化した総合博物館なのです。

郷土の森は、皆さんのための施設です。この郷土の森をより多くの人たちに理解していただくために、博物館の話題を4回シリーズでおとどけします。

═変化する博物館のイメージ═

それでは、博物館とはどんなところなのでしょうか。古いモノを並べているのが博物館と考えている人たちが、いまだに多いのではないでしょうか。ところが、まちの郷土資料館をはじめ、民家園、美術館、そしてプラネタリウムや科学館、動物園、植物園、水族館もみんな博物館の仲間なのです。

それでも、一般に、まちの博物館や資料館は、発掘調査による出土品や古文書・民具などを展示している所が多いからでしょうか、そのイメージをたずねると〝暗い〟〝辛気くさい〟〝静か〟といった言葉が返ってくることが多いようです。

しかし、最近では、こういったイメージから脱け出し、明るく、開かれた教育の場を目指して、博物館は変化しつつあるのです。

═学校と博物館、どこがちがう？═

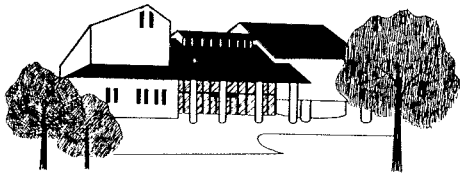
教育の場といえば誰もが〝学校〟を頭に浮べることと思います。それでは、学校と博物館とは、どこがどう違うのでしょう。

ふつう、決められたことを、決められた時間内に教わるのが学校です。そして、何よりも、学校は特定の人たちを対象にしています。

これに対して、博物館には、子供からお年寄りまで、男女や職業の区別なく、さまざまな人たちが訪れます。一人一人が、気に入ったものを、好きな時に好きなだけ学びたい。そのお手伝いをするのが博物館の最大の役割といえます。ですから、子供たちの宿題のアドバイスもしますし、専門の研究者に対しても必要な情報を提供します。また、親と子ども、おじいちゃん、おばあちゃんと孫でも、誰と来ても楽しく学べますし、共通の体験ができるのです。

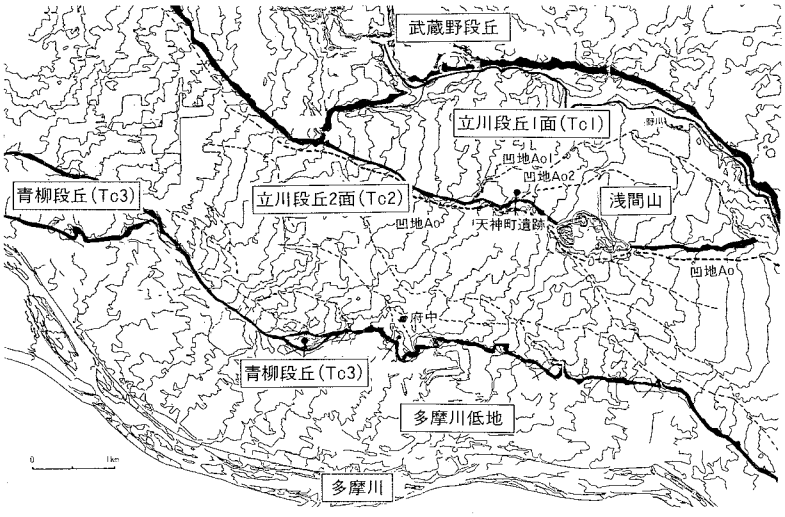
ちょっと理想になってしまいましたが、郷土の森も、こうした教育の場を目指しています。ですから、展示だけでなく、体験学習や講座、ビデオコーナー、Q&Aコーナーなど各種のメニューの中から自分に合ったものを選べるように工夫をしています。府中の自然と歴史と文化の情報センターであるとともに、フィールドを生かすことによって、気軽に遊びながら学べる教育の場を目指しているのです。

さて、今もちょっと触れましたが、博物館の活動は展示をしているだけではありません。博物館で働く人には〝学芸員〟と呼ばれる人たちがいます。次回は、この学芸員の仕事をとおして、博物館の活動を紹介したいと思います。



野外調査から――立川段丘について――

松田 隆夫



府中市周辺の段丘地形　……は凹地(古多摩川の古流路跡)

多摩川が関東山地の峡谷を流れ、平野に出る青梅付近から南流し、府中付近では多摩丘陵北縁を流れています。多摩川左岸の台地は、武蔵野台地と呼ばれ、青梅から東にむけて扇状にひろがる広大な台地です。府中周辺の武蔵野台地は、いくつかの河成段丘からなり、大きくわけて武蔵野段丘と立川段丘によって、地形が構成されています。

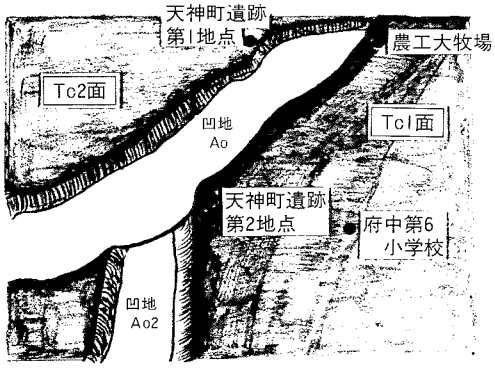
なお、立川段丘については、ひとつの河成段丘だけではなく、3つの河成段丘から構成されるところから「立川段丘群」とも呼ばれています。段丘の形成と凹地地形との関連を求めた最近の調査では、府中地域にも3つの河成段丘から立川段丘(群)が成立っていることが明らかになってきています。

府中周辺の立川段丘群の中で、もっとも古い河成段丘は、府中市武蔵台、都立府中病院が立地する武蔵段丘崖（国分寺崖線）下付近から農工大構内、浅間山南線を通って野川に至る細長い凹地（この凹地をAoと仮称）から北側にひろがる段丘です。この段丘は、段丘を形成した砂礫層のうえに立川ローム層全層をのせ、「3万年段丘」(Tc1面）とも呼ばれています。また、この段丘の段丘崖は、いくつかの凹地によって切られているため、段丘崖の比高があって帯状に続く国分寺崖線や府中崖線とくらべて連続性がなく、これまで、明確な崖線として地形学的に位置づけられなかったものです。段丘崖としてはっきりとわかる所は、府中市天神町の農工大牧草地付近および府中市遺跡調査会によって現在、調査されている天神町4丁目地先の天神町遺跡第2地点周辺で、段丘崖の高さはわずか1～2m程度の小崖です。

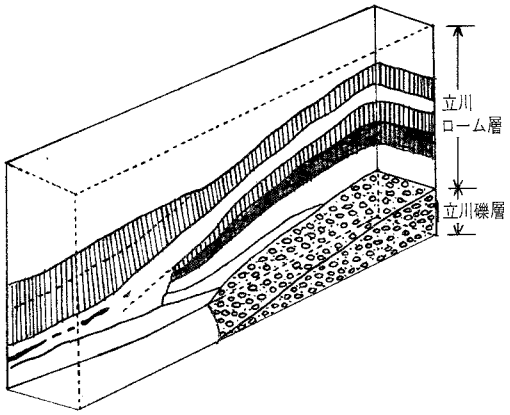
次に古い段丘は、凹地Aoから南にひろがり、南線は府中崖線までで府中の市街地の中心部をのせています。この段丘(Tc2面)の形成年代には幅があり、約2万5千年前から1万数千年前に形成されたものです。

立川段丘群の中で、最後に形成された段丘は、青柳段丘(Tc3面)とも呼ばれ、立川ローム層の最上部層(青柳ロームあるいはソフト・ロームと呼ばれる）をのせ、1万数千年前から1万年前に形成された段丘です。これまで青柳段丘は、立川、国立でよく発達し、府中では発見されていませんでした、しかし、今年6月、京王線分倍河原駅西方で大きく広がる緩斜面の末端付近で、最上部に青柳スコリア（富士山起源の火山灰のひとつ)の密集層をともなうソフト・ロームをのせる立川礫層がみられました。現在、調査中ですが、この段丘は青柳段丘に相当するのではないかと思われ、段丘と多摩川低地との比高は1m前後にすぎません。

以上の立川段丘群の勾配は、多摩川低地とくらべて急であり、ウルム氷期の海面低下に成因をもつ段丘として、いずれの段丘(Tc1～3面)も多摩川低地下に埋没していく傾向にあります。今後、府中周辺の自然環境変遷の土台でもある段丘形成史を明らかにするうえで、河成段丘を形成した砂礫層、この上に厚く積もった火山灰(テフラ)や段丘上の凹地形成と凹地埋積過程などに注目していくべきではないかと思われます。



古多摩川の流路跡(Ao、Ao2)と凹地



府中市天神町付近(Tc1面)の凹地地形

═最近の発掘調査から═

宝永4年11月23日(1707年・旧暦)、昼も間近いころ(午前10時ないし11時)、富士の麓において大変な事件が起こりました。

朝より繰り返していた地震は人々に不安を与えていたのですが、ついに富士山が大噴火を起こしたのです。巨大な釣鐘型をした噴煙は、富士の南東方向八合目あたりから吹き上がり、みる間に上空を黒煙が覆い隠しました。降り注ぐ火山弾は富士の麓にある須走村を壊滅させ、その明るさや、夜になっても行灯がいらなかったといいます。噴煙はおりからの偏西風に乗って時速30～35kmというスピードでわずか3～4時間で、江戸(東京)へと流れて行きました。

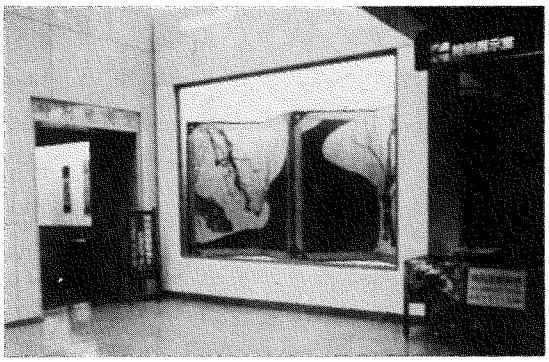
その日、江戸幕府の有名な政治顧問＝新井白石は、午後から登城のため屋敷を出ようとすると、雪のようなものが落ちていました。よく見ると灰ではありませんか。西南の彼方を望むに黒雲が立ちこめ、やがて灰は黒いものとなり積もっていきました。夜になっても地鳴りや地震は断続的に起こり、富士の噴火は結局12月8日まで続きました。この噴火で江戸付近においては火山灰が3～5cm程度積もりました。

もちろん新井白石が上空を見上げていた頃、府中でも火山灰は降っていました。火山灰は江戸に比べて少なかったようですが、甲州街道の宿場町としては、風が吹けばホコリになる厄介な存在で、江戸の住民同様穴を掘って埋めることとなりました（都心部の調査においては火山灰を埋めた様な跡が見つかっています）と、いうような話を想像させるような穴を現在大国魂神社の西側で調査しています。

（宮西町 日野屋地区の調査から・荒井）

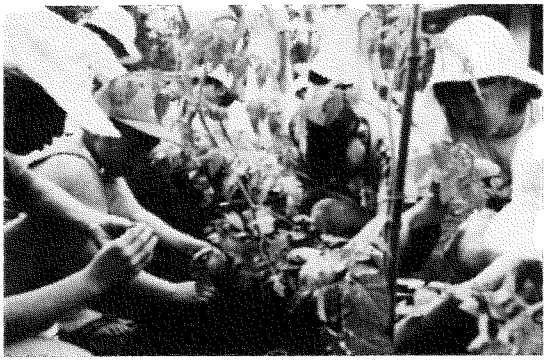
富嶽三十六景(宝永山出現)其二

カメラアングル



◄ 4/4～5/5
開館記念特別展　美術にみる梅

市の花〝梅〟をモチーフとした絵画・墨跡・版画・金工・陶磁・染織の7部門にわたる美術品を展示。名品の数々をご覧いただきました。



6/6～　　自然探偵団 ►

25人の子供たちが、梅の実とりや畑作りをしました。子供たちには新鮮な体験！友だちの輪も広がったようです。

◄ 6/7・14・20・27　武蔵野の植物

武蔵野の植生・シダ類・草花・樹木の話題を4回シリーズでおとどけしました。日頃気にとめない植物も取り上げ好評でした。

6/21・28　梅の実利用講習会 ►

園内の移築農家の庭先で梅の実の利用法を紹介。梅ジュースの試飲は大盛況！　梅肉エキスには顔をゆがめ〝良薬口に酸し〟

◄ 7/2～　陶芸教室

初心者を対象とした教室。土の塊が人それぞれ、思い思い？の形になりました。気分はもう陶芸家！

あれこれ ―七草を考える―

秋の気配が近づいてきました。秋は、鳴く虫や赤トンボ、紅葉などに代表されるように自然の景観がもの静かで、ロマンチックに感じられる季節です。なかでも秋の七草は古き時代より親しまれ、情緒豊かで万葉集にも歌われています。春の七草が、緑にとぼしい初春の季節に採集して食べられる草を対象にして選んでいるのに対し、秋の七草は花が美しく、あくまで観賞を目的とした種類が選ばれているようです。

萩(はぎ)が花、尾花(おばな)、葛花(くずばな)、撫子(なでしこ)の花
女郎花(おみなえし)また藤袴(ふじばかま)、朝顔(あさがお)の花

と万葉集の中でよまれているように、これらは秋を代表する7種類の花々ですが、尾花はススキ、最後の朝顔は私たちが普通呼ぶアサガオではなく、ムクゲまたはキキョウであろうといわれています。郷土の森の園内にもハギ、ナデシコ、キキョウの花がはやくから咲き目を引いています。

今日、秋の七草として親しまれているのは、山上憶良が秋の代表草として選び歌ったこの作品に発するということですが、府中ではフジバカマはなく、オミナエシはもう見られなくなっています。最近ではセイタカアワダチソウやキクイモなどの帰化植物が多く入りこんだりして秋の花は他にも多くの種類があります。あなた自身の秋の七草を決めて、外を散策するのも新しい楽しみ方ではないでしょうか。

キキョウ

インフォメーション

9月～11月の行事。くわしくは市広報、行事案内Calenderをご覧下さい。

●天文講座
9月23日は部分日食。簡単な観測用具の作り方、観測会、日食の話などをします。

●土器を作ろう！
国府の時代の土器を作ってみませんか。本物の出土品がお手本です。

●星空観測会
秋は木星観望のチャンス。また、アンドロメダ大星雲など秋の澄んだ空を味わって下さい。

●園内自然観察会　―冬に備える植物たち―
収穫の秋、木の実が枝葉を飾る一方で植物が寒さに備え姿を変えていく様子を観察しよう。

●唱歌を聴く会・歌う会
子供から子供へ唱い継がれていった小学唱歌をなつかしい小学校の木造校舎で聴いたり、オルガンにあわせて唱ってみてはいかがですか。

●唱歌とその時代
なつかしさや郷愁を誘う唱歌は、どんな社会的意味をもってきたのか。唱歌についての講演を行います。

●星と音楽の夕べ
プラネタリウムでは、日本のうた特集を組みます。故郷のなつかしい風景と星空を音楽とともにお楽しみ下さい。

●ミニ展　音楽の教科書と唱歌集を展示！
明治から今日までの音楽教科書、唱歌集を園内の小学校に展示します。

※開館記念特別展「美術にみる梅」図録
好評発売中〃　￥1,000

あるむぜお　創刊号
発行年月日　昭和62年8月30日
発　　行　府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423－68－7921